



卷之三

奇談

報仇自來也說話卷之三

勇正村逢衣重併鹿野苑詭言条

感和亭鬼武著

高喜齊校合

武江

是謂亂源さきば自來也獄舎と破り逃亡城内まで大に驚

さる事勇源方而身を自棄せりや萬丈も兒子信吉の謀

黒姫山と憎むる自來也ゆく彼所へ到りと想ひゆれど

今更信吉の搜求め連島とも主あるべく草木人に頼ひ諸國を

報仇自來也說話卷之三



勇正村逢衣重併鹿野苑詭言条

感和亭鬼武著
高喜齊校合

武江

是謂亂源さきば自來也獄舎と破り逃亡城内まで大に驚

さる事勇源方而身を自棄せりや萬丈も兒子信吉の謀

黒姫山と憎むる自來也ゆく彼所へ到りと想ひゆれど

今更信吉の搜求め連島とも主あるべく草木人に頼ひ諸國を

巡り敵を尋ねやとちよ子材あめと兒子うどち御て是
キ満ひゆ先駆連も打捨多々とせ行ふ事のぬれても解
押移源太郎 始より玉久と契約あずば何卒法玉を廻
父お讐言と被へと云事ひし出べし想ふ折此一城主の子息
左門之助国時妻在り身持故物は廻くあらず舊中の
取次官ともめり竹かど源左郎ありて國時の故舊もえみ
起りて斜陽うる季生をめぐら女と勢へありもひゆと
すすめとす安だす遠きけあ、自云財の故物れども除へ
左去ひゆ不見女ちかくに奉仕ある婦人みんむにん我那
引在くをば行被す黙て見見を加く若處の故舊を止め
忠義一國み仰ひばされど此事一個こそ計して他誹謗
あひんと鹿野花軍太夫小判と商儀倣一時に軍太夫のり
らく裁り重て心附一故是追跡人す是處でもかげ一ヶ免用
たつ之助更みなし不禮を若處ゆる染状廻せあひんと猥の
行狀あるよ一也何卒半夏彼所に到り被す計ひあひ
く乃翁もかどあるひようよりよと已が進入仰一事を
押出せ忠臣教子源太郎と勘ぬ鷺々と清那が御はゆ
りもゆく軍太夫ハ業子んと達らせあひゆきそぞ今げ不^ト事
ても折かかきてを口説ども更ようけかうざりゆく御はハ和
わすびん座巧くゆあゆもと方つ之助を志をきく

鹿野苑が申事を何事とも言へばとあがむるも是れも
源ちトハ軍大夫と御会せ那列並み到り事のどもあく
ある事のほの音と似テ大坐より西御行程解くは即し
やハ早枝と改めあらゆる方之助よりお院と向仰あく
立歩く是食を起ハ夫の西村復源ちしも年月ハ萬葉も
兄達へどもあらぬお妻の衣重あらばおひに暫言
呆果若しが傍ひあ落リ一人を下すまきば衣重六枚さ
悲一とお這也五年すハあらぞやと源ちの據よと
もぐらやて添ちしも想ひ掛ざる事ねど今ハ着敷お妻と
あゆが生子ゆとゆふをと捕く室延是處と號ひ矣と
打拂く逢ざりが帮くぬ所よ弱り満足よこそえとづれ多
先年祖税乃未進不依く某囚獄乃身と坐うたびしうち
父喜樂亦横死児子と汝行法、知さば何卒汝子廻
ゆひ事乃動靜を母んと想かうちをも富家家
臣とあは是非なく歲月、すれども父の讐言汝遣が身ひ
う一想ひぬ日とてひねじら日隣ふるニヤ赤壁ひそめ
暗末敵は動靜も其方ハ知はん老早く子細哉
聞せよと尋ねよ衣重もて泣泪を拂し何く角か角さ
入尊賈、言も不出さみてと尊舅北極死ヒハ妻モ
動神話せひと侍ある次、同せよとおどと姿と休す事モ

白痴也說詩卷之三

石公作

タ

四

一

年

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

日

生

セ

リ

三

月

四

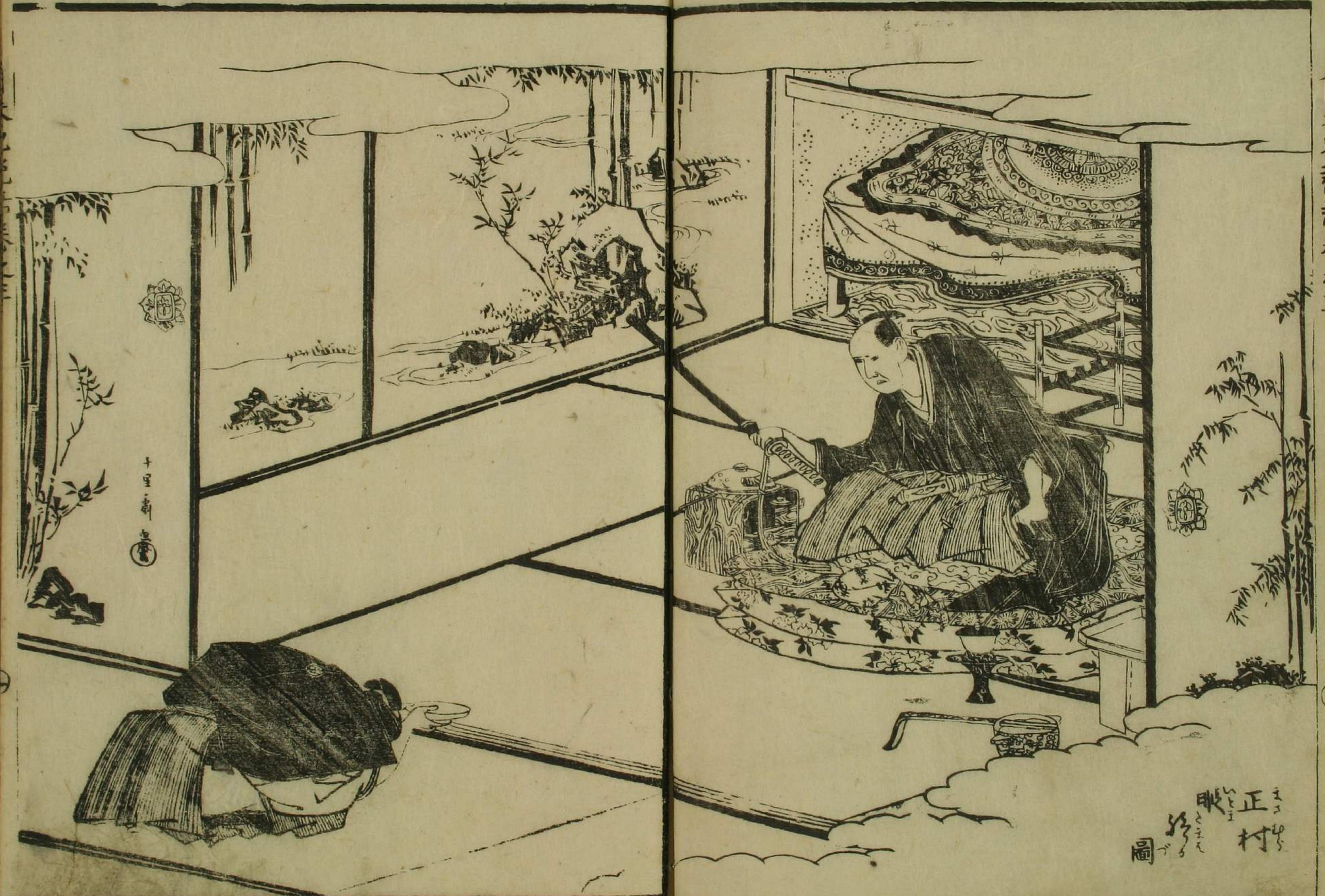
日

レレテ夫も泪於て餘る山にて他キカクヨリ至るて
葬りしを慕ひ少く拂を討椎津家抱と爲し始末成
向つけ衣重ハ洞にノルが如ク自身乃な歴子が身と賣
其金カヘに大失み難を致ひ一と想ふ子遠ふも貞
横死傳ハ取れ残外一ダ知れ候ぬもアリシテ他キニ
加エヨリトモ走て今子日を加ケ益城代仕業事
夫のちがくん佐吉の行舉を知れモ此身まで箇役との
子ゆふく御事かとハ未だはきくも女の道ハ忘却サ
これまたもたうえ助反且軍太夫より横死傳もはなあ
歎待候しとあり一事皆語合盡之立中のハ洞にて
ありぬかる。折り鹿野苑軍太夫源八郎に約めハ妻
入来りしが兩個乃至半身ノ說活に泣入る早枝不審さを
次お間小同耳立窺バ汝彦山にて軍太夫が討る事ハ
源太郎の親姫多林といゆひすく其仇を搜求動靜
又早枝も源太郎も妻女あるまで不残す取驚顛は
溜息絶侍も浮雲ノ事あるども渠等が身の上知れども
家武蓮れ安ざるところ此上ハ折をりて源太郎を討て捨
早枝を己ヶ妻ふせをやと想ひ立こやと不敵をあれ曾
あつて、軍太夫を受拂て今まで所よアセぬ身を二個ハ
驚起跳退てよきくぬ姓すありゆるや軍太夫も何れ

取て風情す。款待柰何。正村後早枝の得があるや。是れ
かく珍りあらと曰ひてきをも源ちしも傳へて以て
先刻さう委細十種せりとこと何物うち早枝後す
若殿、是見ゆる事の事のぞ足下す。もあと過あはれ
早枝どものゆも清家なりと先傳ふたのせねると兩個お言す
はまゆ間にあは枝折り怪平あると勇鹿野苑ハ立改す
志あらばあらんと兩個一同す立あが衣重ハ活もと言
残夫さん裏されど何と詮と涙を色叶入達。禮義
乃焉向幸来とあひよ式被す。正村景国才連立
城内にて立帰ぬ別て單木年を源ち而び敵と想ふ
よーを立間ほしめのぞ何れ少し邪广ある源を先後を
うそ城内を追拂ひ途中おれりと人知れん討給あだ我身も
子事ナリ納りなとた門に助に密すいと初ハ勇源太郎
うとあらぬようゆめゆく早枝どものぞ多くを加く申まん。渠
一個あらぬくあらじあとどくと甚もあうて動靜を窺む
異見よ。傳う樂素うあくやかせゆと又あひて手子を
取て過越方を説話を做。濟河復のあるすもあらじ思
光景みて割へ早枝どもを延連立退くもと約せし動靜うれ
也ふ。是れ是近ひ隣り不遠とおほくあらじと言と語り
中せしゆ國時大ナセ。也れ皆に奴ふ兩個どもひまほよ

あともやと國下をもめるを軍太夫止命百人とも思ひて種
羽れをばす某子ゆにせあるべく大宋へ言上樂本も思ひ因故
追拂のせやさんとさりすまふらと辯を巧子ヤシラムニ源をせ
お金一早枝ハ己ヶキヲアソヒと功の勲章より也せんへたの助ハ
軍太夫が言を承ひ御足下に付せばと仰せどもおて鹿児苑
國久み初子おうり折を裏ひ拂ひよと詮へてく爾所
こども身持可一かづき居力のよきよしはれハお便お妻と
私情を通一其上店のモケドお放蕪城進奉申もされ
源太夫乃ちひとき子あふゞむかひ不届者を甚同席す
ゆ一改勢に拘りそん事封内め開て候ふく何共謀謀
干万あり高賢えりて然るべと侮辨ハ任せ諭奏却く
國久ハ源太夫が生貨かるおとおがすれどもお思鬼おせ
侍子軍太夫ひよひと身ひきゆく所子歎待客子源太郎を
百れ軍太夫汝を倭弓又西校子ヤ立れども軍太夫が意不
見面と云阿まハ樂々心腹様さんあ先憲ひ波がん射の仇討
眼と處て一表向ハ引ぐるよ早熟すあくまの殿とすほ仇討
復を功成て帰美矣片手をもつて併疾發是れ調度すが懷城
連一立席るをとて刀子路費百金を送り手をよへ持すを
源太郎、難有君哉あとや感歎を催すと程すやうが致すて
立候する新歎一まことにゆて我弟以下僻静子用事

眼
絵
圖



あひ折うる大目付追惟今み出立アヒタマツルカタシタマツルタマツルとてりあへ傳持と立せられど
県吏立會カウシキのて勇源ヨウジンをあつと敵私思石に不叶事あるよと
承の時トキおのれりの老早城内延拂ヨハシシロヒツすべりと渡されゆき不累スルと
清流セイリュウあて私宅へ歸り下終トクシマより今子コノコノとよひとまもと遣ハサウ一妻
衣重ヨウジンと内シナくまゆ文選モンゼンを傳ハシマツルすとあて動靜ドウキンをかへせ連す
旅粧リョクザンあー何國ナニクニと當カタせぬスルがよろづ字サカナめぬスルをあいと仇シテ
主所シテと見シムして先城内シシタマツルと立せり

正村衣重復舉併速水雅次廊条

鹿野苑軍太夫カネノエン大吉想シヤクひ北行ヒタチ不源太郎ヒツラを追出ハシマツル今イマを早枝ハヤシを良ヨシに
あくアクと想シムふ衣重ヨウジンを源太郎ヒツラ驚ハラハラた染カミをそくソク逃ハシマツルハ我ガは今コノ
モモ益アシキ必遠源ヒツラを而シテと參シマツルし行ハシマツルとぞふゾフを停ハシマツル多タダや源太郎ヒツラ成
計ハシマツルて松早枝ハヤシを奪ハシマツルひ何國ナニクニも立退ハシマツルんと同ヒトツ、半早ハヤシに肩シラを取ハシマツル
城内シシタマツルを拔出ハシマツル早枝ハヤシは子コノだタマと役ハシマツルをあこアコて追ハシマツルゆく世セと寄シマツル吳
なシタマツル呂カタマツル唐玉隨カタマツル曉ヒタマツル帝廣王ヒタマツルを前ハシマツル小生ヒトツの西天門カタマツルといつ難
往ハシマツル直カタマツルと子漢人カタマツル干ヒタマツル事ハシマツルとあタマく因カタマツルへお渡ハシマツルりしきを傳ハシマツルるや
推津家カタマツル代カタマツルみ主カタマツルわカタマツルとあタマうタマうタマが城門カタマツル乃カタマツル奇カタマツル物カタマツルとつタマを茲カタマツルとれカタマツルて
時ヒタマツル其カタマツル死ハシマツル身カタマツルいおタマく名カタマツル波カタマツルばカタマツルて切カタマツルとつタマを茲カタマツルとれカタマツルて
ほカタマツルべ又カタマツルふカタマツルか北カタマツルあタマかの一刻カタマツル刀カタマツルもちにこれカタマツルをうタマする様カタマツル

難生せばと云ふ事一抄。奇代乃物がれを國人平日仇子は
きせり。薦文軍事あり。折し軍大夫も。其の如き何事
盜賊。と云はれ。あり。豈、於時帝と遙と慕ひ。盜賊先承家に
ゆく。而一通。とどむ。か。大切。品。恐れ。一萬中。未だ。詮義者。
軍大夫も。夜持。度氣。晴。而。早。枝。が。幸。に。行。東。推。津。家。を
立。退。と。軍。も。戻。ゆ。と。日。僅。い。と。那。西。天。草。を。懷。ナ。ー
足。故。跋。遊。游。手。推。は。か。を。遂。天。極。す。め。す。か。に。衣。重。ハ。勇
源。う。か。江。を。暮。い。本。街。方。を。志。一。九。三。里。も。赤。く。は。と。と
想。す。じ。歸。人。み。足。弱。て。駒。ぬ。逃。を。走。一。ふ。里。痛。く。僵。く。而。も
夕。陽。午。頃。バ。ん。せ。け。と。ル。泣。ま。が。平。懦。と。り。る。ま。力。松。あ。よ
懸。歌。小。折。兵。あれ。軍。大。丈。ち。壁。筋。と。り。戻。て。馳。来。い。が。遠。眼。ト
それ。と。又。西。出。を。宿。を。あ。ん。で。う。り。る。を。ア。る。よ。う。衣。重。大。み。駆。る。に。這。者
我。退。く。よ。赤。る。わ。み。あ。ら。ん。何。と。り。ば。ぬ。を。遣。れ。ん。や。そ。想。あ。ち。軍。大。夫。
衣。車。を。と。と。一。波。が。こ。坐。て。ま。か。便。ハ。源。を。う。お。ほ。を。追。す。て。の。事。お。う。が
ゆ。あ。う。扶。持。が。み。浪。士。と。も。は。と。延。連。行。も。通。ま。え。控。あ。ん。を
必。至。あ。れ。が。赤。く。よ。往。し。ま。う。と。口。え。か。が。る。方。自。ん。夏。何。卒。賺。て
軍。大。丈。を。と。計。一。捨。此。難。を。避。を。や。と。意。と。極。ぞ。く。是。近。し
情。の。人。や。又。す。や。一。少。年。を。あ。ま。く。と。も。寢。ハ。源。を。あ。り。ど。の。少
記。あ。る。や。特。と。つ。れ。あ。申。セ。ー。と。令。出。と。妻。を。根。捨。皆。程。の
原。を。く。じ。の。為。情。を。う。す。と。想。ひ。よ。き。と。身。を。君。ん

おほせあひせんと咲鳴傳と軍太夫が捕らえ取る一刃と
切れど不審加井鹿野苑馬手も駄船に情や女め続乃
甲波又あさと又振るを手とまく揚船拵取腕を船上
衣重が綿くる腰帶玉をもと繩上縁お松の大木よ庭と
猪月大の眼をぬかしき汝ふ意す不従吾己あらば
手向じせんとふ敵奴ゆくへろに廻り饒一深き人
左手と左足を併ふ生置ドと腰刀を内くりて威をばれど
衣重ハ奮起み取ちまどの自身情のうあくは禁を解
穿く源石いとの子達者てゆべゆく夫と女達人々と打撃
人も途絶くそへざらふぞ軍太夫ハ勢い想くことても余計に
魔ぬ女りけ立てて敵ノ折源源も源をもと慕ふもゆく
と猶えあり松の木水乃及子突母ハ呻と叫び魂消す聲し
お振じやよ單太夫殺さばうせ女め一念行ふあらわくもあうと信す
おもむかと眼逆立變乱さも憎一に光景ちう軍太夫ぬゆ
故あ子憂ゆし難ひかううそ想ひかれ日升波と源太郎と説話せよと
喜びよ源太夫まで秋を泣れ仇と報へとあく
切害あせりよ單太夫とむかしぬ源をよし血氣の眼の
前よほよ其を仇ともちうべと云ふ魂泄り床と魚幕小

添
部
衣
被
奉
の
圖



源ちくとみと五より遅附復拳手切て冷歎り泣き遅行を
三途の邊より待合せよとすすり衣重車御へ諸口清や珍多
老早や木かと初もと仕候極極ひづくあ義子つけてもあくと
源ちくとの敵ハ鹿野花單を又してまかうをゆき候もやん
動靜舊言もくせらぬやと大聲上で泣叫ふ息の根止とすら切
同九度てうすぬるれさよ幼き源ちくはしてまくぬ旅せぬぞ
城内を生くよき異賢村下到り名城長をもあく立寄りゆく
人難處他邦に歩ひばとく事も事も事若鴻並世通勤小差勤め
遠に女の呼ぶ聲何事なくと事もと衣重車御身切望見苦
形みし一念力瞬間眼先へ突入れと見えりう夢と上樹は
源ちく後を以て一軍方未よて安し半込れば半景といひ百見
あくせび先の水源ちくがと同ゆと踊跑く鹿野花單孤やん
軍太夫云ひてあくさる父の仇源ちくは計りる在事も比寧勇
源太白正材親乃敵妻の仇記念せよと指揮に切身と身を棄て
丁度毛留點た綱立波荷程働くと我よ不仕立度也保あれど
義松といは等夫婦諸共に我半小城うち除却因仰げ刀の導
先も老早早枝り追蹤と恙外て切入白刃清の流の太刀と敵
令限りと切放ぶ原末安ひと手練めよもぢ權一時を移せざ西村
出術拂りしば駕西とめ、軍太夫少切跟れど西天門み徳あらば不死焉
軍太夫事若甚に車孤く折太刀の餘え手ひの肩と肩相付

自來也説話卷之三

三

あひぬれど軍太夫ハ前少まほひ源太夫ハ肩先もくちのむすうまで功さう
らき呼とぞうに仰れぬぐり有念とてせう起よんと通逸とこうと
殺ようた地へ白刃突き、遂に逃退冷咲いよ源太夫、残念をやせり
半島半凍の切先某甚感心せう今軍太夫ふ誓言らるゝと萬象が
立ちと心傷く祀女房か対面せよは年齢者何程の術ありとく
おれあひ老早に椎漆家ぬきと西天草も我年になれば又心驚く
矢柏主我身は不活躍父兄之書も津れ魂も消へぬとお葬西口源太郎
芭翁とゆきとほりと述伝ハ西天草を奪ひ一命ゆえあつる間程する
極悪人西天草を所持做ひよ非べ聲までに暗くとハ計略ドモと
芭翁お父と妻とい復残追も汝が力大手余念を漏れず致害せ
ま然し魂ハ眞途よ極くとも魄も世土よ止く復讐多々但かと博紫
勢ひ流石お軍太夫も身の毛立くおがゆか面倒へと捕て罷止みの又よ
咽えをあく首江原ちしぐ有名お天相で黒あくれ等先生年
自來也に拾ひゆき、併吉ち樂が米穀育みて孤長子は何ん例登用
ナリテニモ善貌の少年故自來也あつとも這を心嬰兒より
書と教出義とひし咸熟練め一ぶ大人才とぞも義よちよび
然る年不待人のてう光陰耳を知ぬか併吉帝今ニ年十六歳子
娘りきと兼く自來也の活みハ原故勇源ちしこ村といふ者
兒子みく汝が祖父としてる老人横死の時は產山あり捨て財
帰りしとの形れをおくハ父アル遭祖父乃仇をも討へと那

其二



系圖をアセ教訓あぬれぞ教ざるあら源をも乃事子取れ
自來也私高祖おとく私歎よりも私せ事を済く感歎一私雖出た
あゝ急ぐ越後おれおとく自來也古捕られ囚獄を遁れ出され
行方知れどよへべ何卒立所を搜求尋達と想ひ立
先那地に到り動靜を観る原未御父乃仇をも仇せりとす
討取度ゆりもあれど自來也と尋け諸共よ他邦に生れ
てゐあらむもむられ松ハ勇侶吉郎の名を包速水雅次郎と
名すア旅難一て齋一個信濃多羅山を走出越後路にて
爲一平懶乃松原よ若城の頃一毛日ハ西山に着て宵間
あゆふ怪や人をあやひ曲者血刀ぬぐふ鹿れ先用ア越後源をの
下駄と云は軍太夫切刃身をかゝへばさうと拔合又打城と詰等
切先余く雅次而ゲ弓手み縛かひくそれどんも石付共益城
ありやあゝ恨あるを討罪せ一あくび旅客共某ひるよやう
あれども血迷子く助釤のものと想し及向やう但一山城夜盜の斬
形くぞ刀片下子余と断んとお手子不似合丈夫の言軍太夫
初めて旅客うたもくぶ罪造り少々益ちくじと意ふ想て刀剣
を取一散々暗をひきく廻行後月代上五バ白星のと源をも
夫歸り亡歟もあらへとケリするまで雅ニトハ前後と源を
一個あくべ二個までキヤウケテお曲者未行あるけり不便のま



其三

謐シキと身をもとミツルとミツル做折柄ヒラタ付タタケとタタケ血收サクリ眼跟マツカケに停留リモウ切先カツセンのさとを
弑手スジハにゆきとミタケ城シテい取ヒムクと懷中マツカケより紙シテさりとミタケもに流フす血收サクリ
源太郎イシタロが死體シテよかシテ不審ハシブの因縁ウエニあり其ナシ血收サクひとミタケを纏マツカケい圓マツカケ
源シテはなシテとミタケ雅マツカケの角カツこれかきシテとミタケつけ他人タチ共シテ血サクをハ別れハセバノ舞動マツカケハ
むとうシテとミタケ舞マツカケとミタケやそれと原ハタケの懷マツカケとミタケと指シテ入スて
紙シテ入スと揚マツカケ出スとミタケ改ハシブを中シテある一紙シテ子勇源太郎イシタロとミタケ捨マツカケる爲シテ償マツカケ入ス
あるを月明ハツメイと透マツカケ一讀シテ取マツカケ作マツカケし取マツカケ——這也我シテ在シテ又シテとミタケせう傳社
血サク筋シテ轉マツカケしシテ親子シテの縁シテとミタケほよもよ上シテハ批シテ婦シテ人シテ母シテ人シテをあら
すシテとミタケを灌マツカケば固シテ河シテよ集マツカケ血サク筋シテとミタケ懷マツカケとミタケ身シテ自シテを源ハタケをあらう故
章シテ子阿衰重アシキヨウどの妻シテとミタケ一シテゆきシテかシテ妻細アシカズの動靜マツカケとミタケとミタケとミタケ
敵シテを身シテと歩マツカケとミタケで傍シテ了シテお父シテ父シテ也シテ小人シテ浦シテ父シテの後シテ
轟シテ事シテ母シテ人シテ也シテ是シテ大シテ也シテ准シテ御シテ先シテハ父シテ母シテ仇シテ變シテ
計シテ一シテ對シテ事シテ何シテ才シテぞシテ那シテ曲シテ者シテまシテハ折シテ一シテとミタケ身シテ強シテ逃マツカケ
先シテもシテ也シテ何シテ國シテ近シテと追マツカケ

